

謹 呈

With the Compliments of the Author

中世および近世アイヌ文化期遺跡から出土した作物

山 田 悟 郎

Crops excavated from remains of Ainu cultural stages  
in the Middle Age and the Edo Period

Goro YAMADA

北海道開拓記念館研究紀要 第27号 1999年3月別刷

Reprinted from

Bulletin of the Historical Museum of Hokkaido (ISSN 1341-2795)

No.27, pp 9 -18

Issued March, 1999

Historical Museum of Hokkaido, Sapporo, Japan

# 中世および近世アイヌ文化期遺跡から出土した作物

山 田 悟 郎

Key Words : 中世 (medieval)、近世 (modern)、アイヌ民族 (Ainu)、農耕 (farming) ヒエ (barnyard millet)、アワ (foxtail millet)

## 1. はじめに

河川でのサケ・マス漁とアワ・キビ・オオムギなどの雑穀農耕を生業基盤とした擦文文化は、12世紀末から13世紀にかけて終末を迎える。擦文文化成立時に利器として金属器を選択して石器を使用しなくなったことにより、交易で利器を入手しなければならない自己完結経済の崩壊が始まり、その終末には煮沸具・容器として使用してきた土器の使用を止めて鉄鍋を選択したことにより、交易によって自己生産できない生活必需品を入手しなければならない、自己完結経済の破綻がアイヌ文化成立の背景となっていた。終末を迎えた要因として、鎌倉幕府による奥州藤原征討に端を発した東北部の社会的・文化的動向や、平安末から鎌倉時代にかけて日本海沿岸ルートによる急激な商品経済の発展があったとされている。

また、13世紀以降は寒冷期と温暖期が短期間で入れ替わる気候の不安定期であったことが阪口(1984)、安田(1990)、北川(1995)によって指摘されており、不安定な気候がそれまで生業基盤の一翼を担っていた雑穀農耕の継続に大きな影響を与えた可能性も要因の一つにあげられる。

擦文文化の後には数百年にわたってアイヌ文化が展開され、中・近世のアイヌ民族は擦文文化ではそれほど多くはなかった貝塚を道東のオホーツク海・太平洋沿岸、噴火湾岸、日本海沿岸域に残した(藤田・諸留、1997、大島、1997)。陸・海域における漁労・狩猟・採集が活発に行われ、入手した生活必需品の対価としての交易品生産が行われていた結果と考えられる。近世の記録に残されたアイヌ民族の姿は漁労・狩猟民であり、アイヌ民族によった農耕はまともな農器具をもたない、きわめて粗放的・原始的で小規模なものとされてきた。

ここでは、1663年の有珠b火山噴出物(Us-b)、1667年の樽前b火山噴出物(Ta-b)、1739年の樽前a火山噴出物(Ta-a)に埋積されたり、<sup>14</sup>C年代測定で中・近世の遺跡であることが明らかになっている、1983年に発掘調査された平取町二風谷遺跡から1995年に発掘調査された札幌市K39遺跡大木地点など7カ所の遺跡で、北海道中央部の中・近世アイヌ文化遺跡から出土した作物の集約を行い、交易のため漁労・狩猟活動を行ったアイヌ民族によった農耕について考えてみたい。

## 2. 作物や野生植物遺体が出土した遺跡

アイヌ文化期の作物が出土した遺跡は下記の7遺跡で、コメ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、モロコシ、ソバ、小豆、シソ属、アサ、アブラナ科の11種の作物種子が出土している(第1表)。それぞれの遺跡での出土状況は下記のとおりである。

### 1) 平取町二風谷遺跡

1983年から1985年まで二風谷ダム建設用地内のユオイチャシ跡、ポロモイチャシ跡、二風谷遺跡の発掘調査が(財)北海道埋蔵文化財センターによって行われた(北海道埋蔵文化財センター、1986)。二風谷遺跡ではIV層の暗褐色土中から縄文時代の遺構と遺物が発掘されたほか、III層の黒色土か

らは擦文土器と若干の鉄器、Ta-b降下時までの中・近世の道跡、シカの送り場跡、竪穴状建物跡、打ち込み柱の建物跡、柱穴列や炭化物列、焼土、集石、周溝をもつ墓墳と、墓の副葬品や遺構にともなう遺物として金属製品、漆器、骨角器、動物遺体が発掘された。遺構外からも多数の金属製品、漆器、錘石、ガラス玉、動物遺体が発掘された。Ta-b直下のアイヌ文化期に該当する金属製品には内耳鉄鍋片、刀子、鉋、鎌、鍬先、斧、刀、鏃、マレブ、コイル状垂飾、刀装具、古銭などがある。

4軒の打ち込み柱建物跡内や、P-18、S-26・33、U-29、X-39、Z-42、2D-36区の黒色土から土壌試料が採取され、浮遊選別作業を行って得られた試料から下記の作物種子と、コナラ亜属の核斗と堅果皮、アサダ、キハダ、ヤマブドウ、マタタビ属、キイチゴ属、エゾニワトコ、タデ科、アカザ科、コメ科の種子が出土した（矢野、1986）。

ⅢH-4建物跡：アワの可能性が強いイネ科

ⅢH-10建物：モロコシ

## 2) 平取町イルエカシ遺跡

国道237号線の切替工事により1987年から1988年に発掘調査が行われ、縄文時代の住居跡と土壌および縄文時代から擦文時代の遺物が発掘されているが、主となるのはTa-b直下から発掘された1667年以前と考えられるアイヌ文化期の遺構と遺物である。20軒の建物跡、1基の墓、6基の屋外炉、4基の土坑、11カ所の集石、刀子や鉄鍋など20種類ほどの金属製品、礫、敲石や砥石などの石器、羽口などの土製品、ガラス玉、陶磁器、杭などの木製品、動物骨・魚骨、貝殻が発掘された（平取町遺跡調査会、1989）。

7号建物跡では住居跡内外を縦横50cm方眼に区切り、各方眼ごとに土壌試料が採取されたほか、16号建物跡内、建物跡内の炉、各発掘区内の屋外炉、土坑、炭化物集積個所などの遺構や遺物包含層から土壌試料が採取され、1.00m、2.83mm、5.00mmメッシュの篩を使用して水洗選別された。

水洗選別された試料から下記の作物種子と、オニグルミ、コナラ亜属子葉や堅果皮、キハダ、ブドウ属、マタタビ属、エゾニワトコ、モクレン属、サクラ属、サワシバ属、ミズキ属、オオカメノキ、ミツバウツギ、マメ科、アカザ属、タデ科などの種子が出土した（山田、1989）。

7号建物跡内外：小豆2点

## 3) 平取町ピバウシ遺跡

国道237号線の切替工事にもなって、Ta-b直下のアイヌ文化期に形成された集落跡の発掘調査が1990年に行われた。いまだ発掘報告書が刊行されていないことから詳細については不明であるが、その際に3軒の打ち込み柱建物跡内から採取された黒色土を浮遊選別作業して得られた試料中に含まれた植物遺体の報告をした。報告書の刊行の目途がない現在、得られた結果をここで報告する。試料中からオニグルミの堅果皮、キハダ、ヤマブドウ、マタタビ属、イチイ、サクラ属、バラ属、エゾニワトコ、アカザ属、タデ属の果実・種子と下記の作物種子が出土した。

H-3建物跡：アワ8点、ヒエ207点、マメ科2点、不明穀物8点

H-4建物跡：コメ1点、アワ56点、ヒエ590点、アサ種子片2片、不明穀物36点

H-6建物跡：コメ13点、アワ79点、ヒエ666点、キビ5点、アサ4点、シソ属3点、不明穀物2点

## 4) 千歳市末広遺跡

千歳市根志越第2土地区画整理事業にもなって1992年に発掘調査が行われた。樽前c火山噴出物（Ta-c：約2,000年前噴出）下位の第Ⅱ黒色土中から縄文時代後期の周堤墓などの遺構や遺物が発掘され、Ta-cとTa-aの間に堆積した第Ⅰ黒色土中から擦文時代の竪穴住居跡と竪穴住居跡にと

もなう竪穴周堤帯、土坑、焼土、炭化物集中域などの遺構と、後北C<sub>2</sub>-D式土器、天王山系土器、北大式土器、擦文式土器、須恵器、刀子などの鉄器、石鏃などの石器が発掘され、その上位からアイヌ文化期の3棟の平地式建物跡、18個所の焼土、貝集中域11個所、骨集中域2個所、溝状遺構1基などの遺構と、楔もしくはタガネ状鉄器や鏃、マレク、刀子の破片、青銅製刀子などの金属器、ガラス玉、メノウフレイクなどの遺物が発掘された（千歳市教育委員会、1996）。

建物跡と溝状遺構、骨集中域、貝集中域、焼土と遺物包含層中の魚骨ブロックなどから、下記の作物種子とオニグルミ、コナラ亜属の子葉や堅果皮、マタタビ属、ブドウ属、キハダ、エゾニワトコ、キイチゴ属、タラノキ属、アカザ属、タデ属、アブラナ科、ナス科、ネギ属、ケシ科の種子が出土した（吉崎・椿坂、1996）。

平地式建物跡12：アワ1点

溝状遺構：キビ1点

骨集中域2：アワ4点、ヒエ8点、キビ1点

貝集中域2～3、10～11：コメ2点、アワ419点、ヒエ261点、キビ72点、シソ属3点、アブラナ科1点

焼土：2～3、7～8、16：アワ19点、ヒエ14点、キビ2点

## 5) 千歳市美々8遺跡低湿地部

平成2年と平成4年、5年に新千歳空港建設工事にもなって低湿地部の発掘調査が行われ、表土層から建物跡、棚や柵用の立杭列や杭穴列、炉跡や「送り場」と考えられる灰集中や炭化物集中などの遺構と。陶磁器、火打ち石、ガラス玉、角釘、鏃、キセル、小刀柄、作業台等が発掘された。Ta-aとTa-bに挟まれた0B層からは、小規模なアイヌ集落と舟着場跡、立杭列や杭穴列、「送り場」と考えられる灰集中などの遺構と、板綴舟の部材、回転式離頭銛、マレク、木幣、捧酒箸、花矢、狩猟具、漁労具、農耕具、食用具など多数の木製品、金属製品が発掘されている。また、Ta-b下と10世紀に噴出した白頭山火山噴出物（B-Tm）間のIB層からもアイヌ文化期の遺物が出土している（北海道埋蔵文化財センター、1997）。

表土層、第1・2灰層、0B層、IB-1・2層中の灰集中、炭化物集中、砂集中から下記の作物種子とオニグルミ、クリ、コナラ亜属の堅果皮や子葉、ヤマグワ、モクレン属、チョウセンゴシシ、マタタビ属、ハマナス、スモモ、サクラ属、エゾノコリンゴ、キハダ、サンショウ、ウルシ属、ヤマブドウ、ミズキ、ガマズミ属、エゾニワトコ、ニシキギ属、ミツバウツギ、タラノキ属、ウコギ属、タデ科、ナデシコ科、アカザ属、アキカラマツ、キンミズヒキ、ミツバツチグリ、キイチゴ属、マメ科、ゲンショウコ、ミヤマニガウリ、セリ科、アカネ科、ナス科、キク科、ユリ科、イネ科、カヤツリグサ科の種子が出土した（吉崎・椿坂、1997a、鈴木、1997）。

表土層Ⅰ炭化物集中1：アサ破片2片

表土層Ⅱ 灰集中3・11：アサ5点

第1灰層灰集中10：オオムギ1点、コメ101点、ヒエ124点、アワ47点、アサ535点、シソ7点、アズキ6点

第2灰層灰集中10：コメ9点、キビ1点、ヒエ74点、アワ34点、アサ30点、シソ破片2片、アズキ破片2片

0B層上面灰集中12・13、炭化物集中4、8、9～13：コメ3点、キビ1点、ヒエ8点、アサ254点、シソ16点

0B層灰集中15～20、炭化物集中5～6、14～17、20～21、29～30：コメ6点、キビ2点、ヒエ33

点、アサ205点、シソ5点

0B下面灰集中14、炭化物集中2：コメ8点、ヒエ12点、アワ2点、アサ9点、アズキ1点

I B-1層砂集中3、炭化物集中3、18、22～23：コメ3点、キビ3点、ヒエ11点、アサ20点、ソバ1点、シソ7点

#### 6) 札幌市K39遺跡大木地点

1995年に札幌市中央区北11条西14丁目の高層共同住宅建設工事に関連して、擦文時代後期（11世紀）の第I文化層から中世（13～14世紀）の第II文化層～第IV文化層までの遺物包含層の発掘調査が行われた（札幌市教育委員会、1997b）。

第I文化層では炭化物の集中や柱穴などの遺構と擦文土器や敲石、擦石などの石器が出土し、第II文化層から第IV文化層ではアイヌ文化期の焼土、焼土粒の集中、炭化物の集中、灰の集中、土壌、柱穴などの遺構と、刀子、銀製装飾品、釣り針、棒状鉄製品、鉄鍋片などの金属器、銚先、鏃、刺突具などの骨角器、板材、棒状加工品、篋状加工品、加工痕のある小型板材、楔状製品などの木製品と樹皮、円形の窪みがある扁平礫、両平坦面に擦り面がある礫、サケ科やコイ科の魚骨や獣骨が出土した。

各文化層から下記の作物種子と、タデ属、ナス科、エゾニワトコ、マタタビ属、タラノキ属、キハダ、ウルシ属、ブドウ属の種子、コナラ亜属、オニグルミなどの子葉と堅果皮が出土した（吉崎・椿坂、1997）。

第I文化層：炭化物が集中したDC46からキビ4点

第1表 擦文時代以降から樽前 a、b 火山灰降下時までの遺跡から出土した作物種

| 遺 跡 名            | 試料採取箇所        | コメ  |    | オオムギ | アワ   | ヒエ   | キビ | モロコシ | ソバ | 小豆 | アブラナ科 | シソ属 |   | アサ   |
|------------------|---------------|-----|----|------|------|------|----|------|----|----|-------|-----|---|------|
|                  |               | 点   | 片  | 粒    | 粒    | 粒    | 粒  | 粒    | 粒  | 粒  | 粒     | 粒   | 片 | 粒    |
| 平取町二風谷遺跡         | IIIH-4建物      | 0   | 0  | 0    | 1    | 0    | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | IIIH-10建物     | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 0  | 1    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 合 計           | 0   | 0  | 0    | 1    | 0    | 0  | 1    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
| 千歳市ユカンボシC2遺跡     | 建物跡・その他遺構     | 5   | 0  | 0    | 1488 | 2624 | 24 | 0    | 0  | 0  | 1     | 3   | 0 | 1    |
|                  | 表土層I 炭化物集中    | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 2    |
|                  | 表土層II 灰集中     | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 5 | 19   |
|                  | 第1灰層 灰集中      | 101 | 33 | 1    | 47   | 124  | 0  | 0    | 0  | 6  | 0     | 7   | 0 | 535  |
|                  | 第2灰層 灰集中      | 9   | 0  | 0    | 34   | 74   | 0  | 0    | 0  | 0  | 2     | 0   | 2 | 30   |
|                  | OB層上面 灰・炭化物集中 | 3   | 1  | 0    | 0    | 8    | 1  | 0    | 0  | 0  | 0     | 16  | 0 | 254  |
|                  | OB層 灰・炭化物集中   | 6   | 0  | 0    | 0    | 33   | 2  | 0    | 0  | 0  | 0     | 5   | 0 | 205  |
|                  | OB下面 灰・炭化物集中  | 8   | 4  | 0    | 2    | 12   | 0  | 0    | 1  | 0  | 0     | 0   | 0 | 9    |
|                  | IB-1層 砂・炭化物集中 | 3   | 0  | 0    | 0    | 11   | 3  | 0    | 1  | 0  | 0     | 7   | 0 | 20   |
|                  | 合 計           | 130 | 38 | 1    | 83   | 262  | 6  | 0    | 1  | 7  | 2     | 35  | 2 | 1058 |
|                  | 建物12          | 0   | 0  | 0    | 1    | 0    | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 溝状遺構          | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 1  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
| 千歳市末広遺跡          | 骨象中部（1カ所）     | 0   | 0  | 0    | 4    | 8    | 1  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 貝象中部（5カ所）     | 2   | 0  | 0    | 419  | 261  | 72 | 0    | 0  | 0  | 1     | 3   | 0 | 0    |
|                  | 焼土（8カ所）       | 0   | 0  | 0    | 19   | 14   | 2  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 合 計           | 2   | 0  | 0    | 443  | 283  | 76 | 0    | 0  | 0  | 1     | 3   | 0 | 0    |
|                  | 7号建物          | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 0  | 0    | 2  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 合 計           | 0   | 0  | 0    | 0    | 0    | 0  | 0    | 2  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
| 平取町ピバウシ遺跡        | 3号建物          | 0   | 0  | 0    | 8    | 207  | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 4号建物          | 1   | 0  | 0    | 56   | 590  | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 2    |
|                  | 6号建物          | 13  | 0  | 0    | 79   | 666  | 5  | 0    | 0  | 0  | 0     | 3   | 0 | 4    |
|                  | 合 計           | 14  | 0  | 0    | 143  | 1463 | 5  | 0    | 0  | 0  | 0     | 3   | 0 | 6    |
| 札幌市K39遺跡<br>大木地点 | 第II文化層        | 385 | 34 | 0    | 10   | 166  | 5  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 4    |
|                  | 第III文化層       | 0   | 0  | 0    | 0    | 3    | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 第IV文化層        | 87  | 8  | 0    | 1    | 13   | 0  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 0    |
|                  | 合 計           | 472 | 42 | 0    | 11   | 182  | 5  | 0    | 0  | 0  | 0     | 0   | 0 | 4    |

※札幌市K39遺跡大木地点以外の遺跡は、1663年に噴出した有珠b火山噴出物もしくは、1667年に噴出した樽前b火山噴出物、1739年に噴出した樽前a火山噴出物下位から検出されたものである。

※札幌市K39遺跡大木地点では、2a層で650±50y.B.P.、4a層で520±50y.B.P.、5層で720±50y.B.P.の放射性炭素年代が得られている。

第II文化層：焼土、炭化物の集中個所と灰の集中個所からコメ387点、アワ10点、ヒエ166点

第III文化層：炭化物集中個所からヒエ3点

第IV文化層：焼土、土壌、焼土点集中個所と炭化物集中個所からコメ87点、アワ1点、ヒエ13点、マメ科3点、イネ科8点

第III文化層を除く各文化層から採取された炭化物や作物種子の<sup>14</sup>C年代測定が行われ、第I文化層では11世紀中葉から12世紀初頭の暦年代（Beta-90912）、第II文化層では5点の試料から13世紀後葉から15世紀初頭の暦年代（Beta-90907～90911）と、DA55c1灰集中個所から出土したコメの加速器質量分析による<sup>14</sup>C年代測定で13世紀初頭から末葉の暦年代（Beta-100179）が得られている。第IV文化層では土壌と炭化物集中個所から採取された2点の試料から、13世紀初頭から14世紀初頭の暦年代（Beta-90904～90905）が得られている。また、Pit12b土壌から出土したコメの加速器質量分析による<sup>14</sup>C年代測定では13世紀末葉の年代値（Beta-100180）が得られた。

以上の6遺跡のほかに、発掘報告書は刊行されていないが千歳市ユカンボシC2遺跡でもTa-a直下で発掘された7軒の建物跡で採取された土壌試料中からコメ5点、アワ1488点、ヒエ2624点、キビ24点、シソ属3点、アサ1点、アブラナ科種子1点が出土している。

### 3. 中世から近世の作物

#### 1) 記録に残された近世の作物

享保2年（1717）の幕府巡検使一行の編纂による『松前蝦夷記』には「松前西東之地にて雑穀物 粟 稗 大豆 小豆 牛蒡 大根 瓜 茄子 麻 多葉粉 総而畑物土地相應に出来申候」、  
「蝦夷地ニ而ハ粟稗斗作り申よし」との記述があり、安政年間（19世紀）の松浦武四郎による『東蝦夷地誌』などには、東蝦夷地日高地方のアイヌ民族が栽培していた作物に粟、稗、黍、麦、大豆、小豆、菜豆などの雑穀や豆類、蕪、馬鈴薯、大根、葱、胡瓜、南瓜などの蔬菜類と麻、煙草などの特用作物が栽培されていたことが記されるなど、近世の旅行記や各種の記録に蝦夷地の作物が登場している。主に18世紀から19世紀の記録や旅行記などから山本（1996）は、粟や稗などの穀物9種、大豆などの豆類9種、野菜10種、果菜9種、葉菜11種、特用作物12種、果樹5種の計65種の蝦夷地での作物を集約している。

林（1963）ではアイヌ民族が古来から栽培していた作物として稗、粟、黍、麦、蕎麦、豆、蕪をあげているが、種子が微細なため同定が難しい蕪を除いた作物すべてがアイヌ文化以前の擦文文化でも栽培されていた作物である。

#### 2) 遺跡から出土した作物

1667年のTa-b、1739年のTa-a下と、<sup>14</sup>C年代測定で13世紀末から15世紀頃の年代値が得られた7遺跡から出土した作物種子はコメ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、小豆、シソ属、アサと栽培種の可能性が強いアブラナ科？を含めると10種類となる。

札幌市K39遺跡大木地点のアイヌ文化期遺物包含層は、<sup>14</sup>C年代値から中世に該当する14世紀前半頃の形成である。他の5遺跡の上限は不明だが、平取町イルエカシ遺跡、ピバウシ遺跡、二風谷遺跡の場合は1667年よりも古く、千歳市末広遺跡、美々8遺跡、ユカンボシC2遺跡の場合は1739年よりも古い遺跡である。また、美々8遺跡ではTa-bとB-Tmの間にもアイヌ文化期の遺物包含層（IB-1層）が存在することから1667年よりも古い時期までさかのぼる。

札幌市K39遺跡大木地点のように出土した作物の大部分が本州から持ち込まれたコメで、次いでヒエが多く、アワがわずかに出土する程度といった例もあるが、多くはコメよりもアワ、ヒエなど

の出土数のほうが多い。出土した作物のうちコメは本州から持ち込まれたものと考えられるが、他の穀類や豆、アブラナ、アサは遺跡周囲で栽培されたものであろう。ただ、美々8遺跡では籾付きのコメや籾が出土し、0B層上部からイネ属葉身機動細胞の機動細胞珪酸体が多量に出土している（鈴木、1997）。稲作が試みられた可能性は否定できないが、今のところは出土したコメについては本州から持ち込まれものとする。

美々8遺跡ではアサが多量に出土しているが、アサを除けば多く出土しているのがヒエとアワである。千歳市ユカンボシC2遺跡からはアワが1488点、ヒエが2624点、美々8遺跡ではアワ80点、ヒエ248点、末広遺跡ではアワ443点、ヒエ273点、ピバウシ遺跡ではアワ79点、ヒエ1463点、K39遺跡大木地点でアワ11点、ヒエ182点である。ユカンボシC2遺跡と末広遺跡ではアワの出土数が多いが、他の遺跡ではヒエの数がはるかに多い。

アイヌ文化に先立った擦文文化の遺跡では、遺跡によって出土した作物の組み合わせが異なるが、アワ、キビ、ヒエ、オオムギ、コムギ、ソバ、小豆、シソ属、アサ、モロコシ、ベニバナ、アブラナ科、ウリ科、ヒョウタンとコメが出土し、コメ以外は北海道内で栽培された作物である（山田、1998a）。擦文文化の遺跡からもヒエが出土しているが、作物の出土が確認されている34遺跡のうち、ヒエもしくはヒエ属が出土したのは10遺跡あるが、確実に栽培ヒエが確認されているのは5遺跡のみである。そのうち100点から1000点のヒエが出土したのは札幌市H317遺跡と余市町大川遺跡だけである。大川遺跡の場合はコメが多量に出土していることから本州との交易基地としての要素が強く、ヒエも東北地方などから持ち込まれていた可能性が高い。擦文文化でもヒエは存在していたが全般的にはメジャーな作物ではなかったのである。

擦文文化で栽培された作物の中で主となっていたのはアワとキビで、34遺跡のうちアワが出土したのが20遺跡、キビが出土した遺跡が27遺跡で、アワとキビがセットで出土した遺跡は18遺跡であった。アイヌ文化期の6遺跡の中で5遺跡からキビが出土しているが、ユカンボシC2遺跡で24点、美々8遺跡で4点、末広遺跡で76点、ピバウシ遺跡で5点、K39遺跡大木地点で5点とアワやヒエと比較してその数は少ない。擦文文化が終わりアイヌ文化が形成されていく過程で、主要作物も組合せがアワとキビからアワとヒエに変わったと考えられる。K39遺跡大木地点第Ⅰ文化層（擦文後期）ではキビが出土しているが、その上位の14世紀前後のアイヌ文化期に形成された第Ⅱ文化層ではアワとヒエがセットとなって出土していることから、14世紀頃にはすでにキビよりもヒエが重要視されはじめ、17世紀中葉にはアワとヒエが主要な作物となっていたことがわかる。

キビからヒエへの転換理由は不明で、今後はその原因について調査する必要があるが、岩手県や青森県における平安時代（10世紀から11世紀頃）の遺跡での組み合わせをみるとアワとキビが共伴するよりも、アワとヒエが共伴して出土する例が多い（山田、1998a）。

### 3) ヒエについて

知里（1953）によると、アワはmunchiro（穂別・沙流）またはminchiro（東静内・荻伏）、ヒエはpiyapa（幌別・平取）と称され、アイヌ民族にとっては最も重要なもので、ともにaynu-amam「アイヌの・穀物」やumurek-haru-kamuy「夫婦の・食糧・神」で、ヒエは女性であるから新詞では「国土を・支配する・食糧、天降った・食糧、食糧・婦人」とよばれ、「人間の始祖オキクルミが天界のヒエの種を盗んで、自分の脛を切り裂き、その中へ隠して天降ったのが此の世のヒエの起源であるとする神話もある通り、アイヌはヒエをもって太初から存在するものと考えている。従って、あらゆる穀物の中で最もこれを尊び、晴れの日の食糧として桑や酒に造り、また遠く旅する際は、身の守りとして少量でも鞆の中へ入れて携える習いである。」とアイヌ民族の中で最

も古くかつ重要な穀物とされていた。林（1960）もヒエについて「しかし他の作物の種子が皆日本から盗まれてきた来たと言うのに対して、稗だけは天国から渡ってきたと言うところに、この神話の他の伝説より古いことが知られ、アイヌに記憶のない昔から稗が彼等によって栽培されてことが分り、稗がアイヌにとって最も古い作物であることが確かめられるのである。」とした。

しかし先にも述べたように、アイヌ文化の母体と考えられている本道最後の土器文化である擦文文化の遺跡ではアワ、キビ、オオムギなどはほぼ全道的に普遍的に出土しているのに対して、ヒエ・ヒエ属は遠軽町寒河江遺跡でヒエ属が出土している以外、すべて石狩低地帯の余市町、札幌市、恵庭市、千歳市の遺跡に限られる。ヒエ・ヒエ属と同定された種子は10遺跡から出土しているがうち5遺跡は現生のイヌビエに種子の形態が類似した顕果で、吉崎・椿坂（1990）では札幌市サクシュコトニ川遺跡や他の遺跡から出土したこのタイプのヒエ属を「擦文ヒエ」と称し、栽培されていた可能性を示唆している。ピバウシ遺跡や末広遺跡などアイヌ文化期の遺跡から出土した南部稗に形態が類似したヒエは、擦文文化にあっては北海道中央部のごく限られた地域に分布しただけで、ここでは南部稗タイプのヒエと擦文ヒエが共存していたのかも知れない。

秦憶丸撰・村上貞助・間宮林蔵増補による『蝦夷生計圖説 二 耕作の部』のなかには「アユウシアマタの圖」があり、「(略) 稗の一種にして烏禾の類なり。これは蝦夷のうちの地の地にて作りて糧食の一助となす事なり。(略) 是をアユウシアマタと稱す。アユとは刺をいひ、ウシとは在るをいひ、アマタは穀食の通稱にして、刺のある穀食という事なり。(略) この國開けし初め天より火の神ふり給いて此種を傳へ給えり。(略) 此稗を奥、羽兩國及び松前の地にてはまれに作れるものもありて、蝦夷稗と稱す。(略) これを本邦禾穀のうちに考えるに、今いふ田稗なるべし。」とした記載がある。

林（1960）はこの種の稗について「当時アイヌの栽培していた稗は、現在のそれとは異なり芒の長い毛稗で、しかも穂の寸法が直径一寸、長さ五、六寸（普通の稗の二倍）もある大稗であった。アイヌはこれをピヤパと呼び、またアイウシアマムとも称する。(略) この種の稗は、江戸時代には奥羽両国及び松前地方でも稀に作るものがあった、蝦夷稗と称された。(略) それは本邦各地の水田に雑草として生ずる野稗に類する半野生種であって、本邦に於いても上古には盛んに作られたものであるが、余り粗末なものであるため時代の進歩とともに作るものがなくなり、ただ奥羽及び松前などの辺地に於いて、稀につくるものがあるにすぎなかったものである。(略) 但しその形態は『蝦夷産業図説』の「アユウシアマタの図」によって知られるように、本邦の水田雑草としての野稗と必ず同一ではないが、これは人手を加えて栽培したものと山野に自生するものとは、その形態におのずから差異を生じたためであって、もともとは同一種類であって、本邦にも蝦夷地にも共通して存在したものであることは、疑いのないものである。」「したがってアイヌの栽培せる稗の種類には、各種の名称で呼ばれるが実は一種類にすぎない毛の多く生えているアイウシアマムと、南部稗の系統に属する毛の生えていないアイサクピヤパとがあり、(略) したがってピヤパかならずしもアイウシアマムではないが、アイウシアマムは収量が多い上に味も美味であったために、稗の作付面積の大部分を占めていたのに対して、アイサクピヤパは収量が少なく且味も劣っていたために、余り作付されることがなかったので、自然ピヤパとアイウシアマムとが同一物である如く、みなされる場合が多かったのである。」と指摘している。

林（1960）によるこの指摘は当を得たものかも知れない。吉崎・椿坂（1990）によって「擦文ヒエ」とされているものはイヌビエの形態に類似したヒエ属の種子である。『蝦夷生計圖説 二 耕作の部』では「アユウシアマタ（蝦夷稗）」を田稗の類とし、林（1960）では「アイウシアマム」

を野稗としていることから、それらが形態的にはタビエ・イヌビエに近いものであったと考えられる。となると、これら「アユシアマタ」または「アイウシアマム」と称された稗は、イヌビエに近い擦文時代の「擦文ヒエ」の系統を引いたヒエである可能性がある。

稗を遺伝学的に研究した藪野（1981）によって、遺伝学的にみると日本の栽培稗の祖先種は東アジアのイヌビエ（*Echinochloa crusgalli*）である可能性が指摘されていることを考えれば、「蝦夷稗（アイウシアマム）」は先史時代から長時間をかけて人為的にイヌビエを馴化した結果として誕生した、南部稗とは異なったもう一つの栽培型の稗なのかもしれない。

ただ、林（1960）で、収量が多い上に味もよいことから稗の作付けの大部分を占めていたとされる「蝦夷稗（アイウシアマム）」に該当しそうなイヌビエ型の種子は、14～18世紀前半の6遺跡では出土することなく、遺跡から出土したヒエはいずれも南部稗タイプのものばかりである。「蝦夷稗（アイウシアマム）」が「擦文ヒエ」の系統を引いたものなのか、それとも「南部稗」が普遍化した後に、アイヌ民族社会の中で別の栽培品種として確立されたのかが問題となる。

#### おわりに

14～18世紀初頭にかけたアイヌ文化期の6遺跡から、コメを含めた10種類の作物が出土した。コメ以外のこれらの作物はアイヌ民族によって栽培された可能性が強い。とすれば、このような作物の組み合わせをもった農耕による収穫物が、当時の生業形態のなかでどの程度の役割を果たしていたかが問題となる。これまで、擦文文化の雑穀と対比されてきたのが記録に残された18世紀以降のアイヌ民族によった農耕で、それとの対比によって擦文文化の農耕は極めて原初的農耕であったとされてきた経緯がある。しかし、道内各地で擦文文化の集団によった農耕の痕跡が発見され、擦文文化の農耕については見直しの時期にきている。吉崎（1987）の指摘にあるように、記録に残されたアイヌ民族によった農耕の実態は、場所請負制のもとで集落から労働力を収奪されたなかで行われていたものであって本来のものではなかったと考えられる。最上徳内が著した『蝦夷草紙』の凡例十五則に「一、蝦夷地へすべて穀物の種をもちわたる事停止なり。ゆへに耕作の道を知らず、よって田畑の名目も知らず、（以下略）」とあるように、アイヌ民族社会における農耕が権力によって抑圧されて状況があった。

最近になって、虻田町や伊達市などから1663年に噴出したUs-bによって直接覆われた、アイヌ民族によった畠跡が発見された（山田、1998b）。それらの畠はいずれも畝と畝の間の心点距離が80cmから110cmの立派な畝をもったもので、木の叉や鹿角、鎌で作れるものではなく、鍬や鋤を用いなければ造ることが不可能な畝である。一単位の畠跡は長さ十数mで畝列が10本程度と小さいものだが、台地や砂丘上の広い範囲で畝跡が確認されている。畝を造るにあたって必要な農具である鋤先は千歳市や平取町で発掘された当該期の遺跡から鎌とともに少なからず出土している。17世紀頃には規模は小さくとも、鉄製の農器具を使用して、畝をもった畠を作り、そこでアワやヒエなどの作物を栽培した、18世紀以降に記録された姿とは異なったアイヌ民族による農耕の姿が伺える。擦文文化からアイヌ文化へ変わったことによる主要作物のキビからヒエへの転換、「アイウシアマム」と「アイサクビヤパ」の関係など不明な点が多く、これらについては今後の検討課題としたい。

この報告をまとめるにあたり、北海道大学埋蔵文化財調査室椿坂恭代氏には資料の提供をいただくとともに助言をいただいた、ここに記して感謝します。なお、この研究は平成10年度文部省科学研究費補助金、基盤研究（C）（2）課題番号10610405を使用して行ったものである。

#### 参考・引用文献

幕府巡見使編『松前蝦夷記』松前町史、史料編、第一巻

平取町遺跡調査会（1989）『北海道平取町イルエカシ遺跡』

千歳市教育委員会（1996）『末広遺跡における考古学的調査IV』

知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典』第1巻、植物編、日本常民文化研究所

藤田光一・諸留佐織（1998）「道東の中・近世アイヌ民族の遺跡」『考古学ジャーナル』No.425、p.4-7

秦憶丸撰、村上貞助・間宮林蔵増補『蝦夷生計圖説』日本庶民生活史料集成、第四巻、三一書房 林 善茂

（1960）「アイヌの播種技術と栽培作物」『北方文化研究報告』第十五輯、北海道大学

林 善茂（1963）「アイヌ農業の特質と技術段階—本邦焼畑農業との比較—」『北方文化研究報告』第十八輯、北海道大学

北海道埋蔵文化財センター（1986）『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』

北海道埋蔵文化財センター（1997）『美沢川流域の遺跡群XX 千歳市美々8遺跡低湿地部』北埋調報114

北川浩之（1995）「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」『歴史と気候』講座文明と環境、第6巻、p.47-55、朝倉書店

最上徳内『蝦夷草紙』

大島直行（1998）「道南の中・近世のアイヌ民族の遺跡」『考古学ジャーナル』No.425、p.8-12

阪口 豊（1984）「日本の先史・歴史時代の気候—尾瀬ヶ原に過去7,600年の気候変化の歴史を探る—」『自然』460、p.18-36、中央公論社

札幌市教育委員会（1997）『K39遺跡大木地点』札幌市文化財調査報告書54

鈴木 信（1997）「植物珪酸体分析とイネ栽培」『美沢川流域の遺跡群XX 千歳市美々8遺跡低湿地部』北埋調報114、p.674、北海道埋蔵文化財センター

安田喜憲（1990）『気候と文明の盛衰』朝倉書店

山田悟郎（1989）「イルエカシ遺跡から出土した植物遺体について」『北海道平取町イルエカシ遺跡』平取町遺跡調査会

山田悟郎（1998a）「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』第26号、p.1-22

山田悟郎（1998b）「近世アイヌの畠」『考古学ジャーナル』No.439、p.26-30

山本 正（1996）『近世蝦夷地農作物年表』北海道大学図書刊行会

矢野牧夫（1986）「二風谷遺跡から出土した植物遺体について」『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北埋調報26、北海道埋蔵文化財センター

吉崎昌一（1987）「苫前町香川6遺跡出土の植物種子」『香川6遺跡・香川三線遺跡』p.171-185、苫前町教育委員会

吉崎昌一・椿坂恭代（1990）「サクシュコトニ川遺跡に見られる食料獲得戦略」『北大構内の遺跡』8、p.23-25

吉崎昌一・椿坂恭代（1996）「末広遺跡出土の植物種子」『末広遺跡における考古学的調査IV』p.135-141、千歳市教育委員会

吉崎昌一・椿坂恭代（1997a）「美々8遺跡低湿地部から出土した栽培種子について」『美沢川流域の遺跡群XX 千歳市美々8遺跡低湿地部』北埋調報114、p.646-668、北海道埋蔵文化財センター

吉崎昌一・椿坂恭代（1997b）「K39遺跡大木地点出土炭化植物遺体」『K39遺跡大木地点』札幌市文化財調査報告書54、p.106-113、札幌市教育委員会

## Crops excavated from remains of Ainu cultural stages in the Middle Age and the Edo Period

Goro YAMADA

From six remains of the Ainu cultural stage between 14th-early 18th century, eleven kinds of crops seeds such as rice, barleys, Foxtail millets, Proso millets, Japanese millets, great millets, buckwheats, Adzuki beans, Rapes, Perilla and Hemptes were obtained. Except rice other crops were cultivated by the Ainu people. In the case of Ooki locality of K-39 remains in Sapporo City most of the crops seeds consist of rice which were brought from the Honshu to Hokkaido, but in other remains Foxtail millets and Japanese millets were excavated abundantly. Japanese millets occurred from many remains in Hokkaido are fundamentally the same with so-called millets of southern (Nambu) type. Cereal farming was taken place in large parts of Hokkaido during the Satumon cultural stage prior to the Ainu cultural stage, and Foxtail millets and Proso millets were mainly cultivated in combination with barleys, wheats, Adzuki beans, Hemptes and Perilla. Seeds of Japanese millets and cock's-foot are restricted to occur in the remains of Sapporo, Chitose in the Ishikari Lowland and Yoichi Town. However after 14th century the production weight of Japanese millets increased and the chief crop assemblage turned into Japanese millets and Foxtail millets. It is unknown why such a change of chief crops was taken place by what kinds of backgrounds. Japanese millets and Foxtail millets were important crops for the Ainu people and thus they are called as Ainu's crops. In the myth of Okikurumi it was told that the Ainu people stole Japanese millets from the Heaven. According to Hayashi (1960) there were two types of Japanese millets; one was hairy millets which Ainu people cultivated and other non-hairy millets which belonged to Nambu millets. The hairy millets belong to a group of Honshu cock's-foot which were described as Yezo millets in the Edo Period. From carbonized seeds it is evident that Nambu millets were cultivated during 14th and 17th century and there might be Japanese millets which were similar to cock's-foot. This type of Japanese millets probably belonged to a group of Japanese millets which were excavated from remains of the Satumon cultural stage, but this is not fully understood from the present study alone. It is a problem that crops including Japanese millets and Foxtail millets cultivated by the Ainu people played what role in the living style of their life. Until now the agriculture of the Ainu people has been said by basing of records of post 18th century, and their agriculture has been regarded as simple and crude one in which farming tools were never used, no furrows created, or no fertilizer used. However such farming was performed under conditions in which Ainu's labour forces was abused from villages by the Matsumae Clan, and Ainu's agriculture at that time did not represent their own original farming styles.

Recently several examples of farming fields of early 17th century have been found from the coast of the Funka Bay. The fields had well-developed furrows and they could not be formed without helps of farming tools such as hoes and plows. Recent results of excavations including farming iron tools such as toes-heads and sickles from the remains of early 18th century exhibit a new status of study and therefore it should be necessary to notice the agricultural history of the Ainu people.